

～週刊オン★ステージ新聞「バレエとオペラ」関連企画Ⅰ～

薄井憲二バレエ・コレクション常設展

vol. 80

# 《ポルティシのもの言えぬ娘》

会期／2020年7月29日(水)～9月6日(日)

(※休館日はwebでご確認ください)

連載／岸純信(オペラ研究家)

協力／渡辺真弓(オン★ステージ新聞編集長/舞踊評論家)

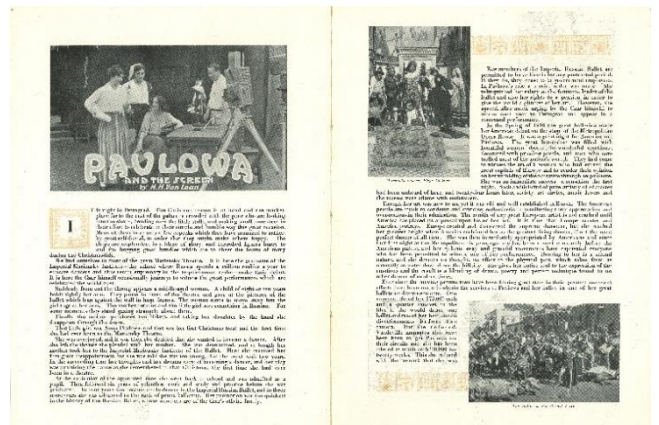
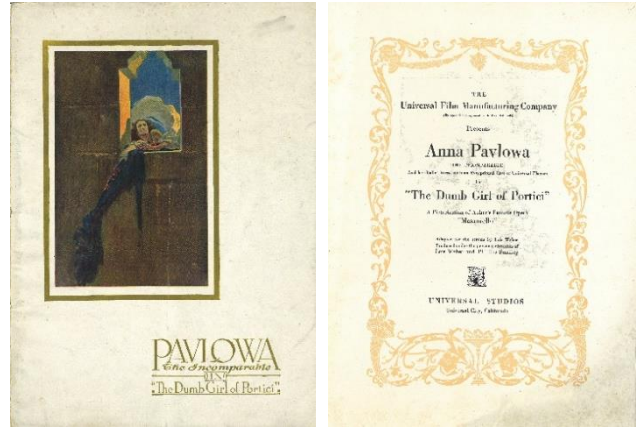
企画・構成／関典子(薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

先述のコミック座ではこの役をエレナ・ボルゴーニが演じ、現代風に激しい動きをしていたが、彼女もパヴロワの表現を知っていたのかもしれない。ゆっくりとしたポージングで一瞬視かせた笑顔に、心を刺された覚えがある。迫真の境地は、時代を超えて受け継がれるものなのだろう。

## 出展資料

◆PAV-0004 映画『ポルティシのもの言えぬ娘』

プログラム/アンナ・パヴロワ主演/1916年



現在、「週刊オン★ステージ新聞」(青林堂)にて連載中の「バレエとオペラ」関連企画として、常設展をシリーズ開催いたします。執筆者でオペラ研究家の岸純信氏は、兵庫県立芸術文化センターでも、幾度も講演などを行われています。

本展では、「薄井憲二バレエ・コレクション」から図版提供した記事と共に、実際の資料をご覧いただけます。第一弾は《ポルティシのもの言えぬ娘》(2020年5月1日号「バレエとオペラ」第2回)より。どうぞお楽しみください。

### ----- 「バレエとオペラ」第2回 岸純信 ----- 国を独立させたオペラ《ポルティシのもの言えぬ娘》

オペラの分野で最も華々しいのがフランスのグラントペラ様式である。オペラ座で上演され、5幕立てが基本。仏語で歌い通し(セリフ無し)、地方色と独立のバレエ場面を盛り込み、スペクタクルを必須とするので上演には莫大な予算を要するが、上手くゆけば壮麗極まりない。かのヴェルディもワグナーも挑んだジャンルである。

このグラントペラの基本形を確立した一作が、オペールの《ポルティシのもの言えぬ娘》(1828)である。

ナポリ人のスペイン圧政への反乱の史実を題材とし、オペラながら主役の娘をバレリーナが演じる—公爵の息子に弄ばれ捨てられたフェネツラがショックで口がきけなくなった—設定だが、劇場で観ると彼女の憐れさに同情する一方で、その兄マサニエッロの雄々しさと郷土愛にも大いに焚きつけられる。(中略) 2012年、本作が久々にパリで上演された折(コミック座にて)、筆者も観劇した。(中略)

ところで、《ポルティシ》の物語は1916年に映画化され、アンナ・パヴロワがフェネツラを踊っている。映像を抜粋しながら目を見ると、緩やかなステップと神秘的な笑みから、「精神錯乱」の模様が確かに伝わり、ドラマの惨めさに改めて思いを馳せた。

## 参考映像

◆2014年4月 パリ、オペラ・コミック座公演より

La Muette de Portici de Auber  
à l'Opéra Comique extraits  
<https://youtu.be/oelBvwseRWg>



◆アンナ・パヴロワ主演の映画より  
SIFF 2017 Trailer :

The Dumb Girl of Portici  
<https://youtu.be/67kUurz2SLE>



◆アンナ・パヴロワ主演の映画より  
Anna Pavlova - Extended film of  
'The Dumb Girl of Portici' (1916)  
<https://youtu.be/8xj-N2SEctk>



(※ 作品名について、オペラは《》、映画やバレエは『』で表記しております)



兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町 2-22

tel: 0798-68-0223 fax: 0798-68-0212

※ 禁無断複製・複製・引用